

(中-1)

こう そ さん 香 蘇 散

[70] 香蘇散 効能と証

出典：『和剂局方』

■効能又は効果

胃腸虚弱で神経質の人の風邪の初期

<証に関わる情報> 使用目標=証

平素より胃腸虚弱で、抑うつ傾向にある人の感冒の初期に用いる。

- 1) 食欲不振や軽度の悪寒、発熱などを伴う場合。
- 2) 葛根湯や麻黄湯などの麻黄剤では食欲不振を起こす場合。

【POINT】 四季を通じての感冒・カゼ・頭痛・発熱に有用です。

【組成】 紫蘇^{しそ}・香附^{こうぶ}（各二錢），陳皮^{ちんぴ}（去白一錢），甘草^{かんぞう}（二分）。

上記に生姜一錢を加えて、水煎して服用します。無汗の患者では葱白（ねぎ）5茎を加えます。

[70] 香蘇散 組成

| | | | |
|-----|---|----|-----|
| 香附子 | 4 | 甘草 | 1.5 |
| 蘇葉 | 2 | 生姜 | 1 |
| 陳皮 | 2 | | |

【解説】 風邪^{ふうじゃ}によるものでは、軽症^{しょうふう}の傷風にしても重傷^{しょうかん}の傷寒にしても、これら「風寒^{ふうかん}」といわれるものは、初期には病変の主体が皮膚にあり、頭痛・発熱を発症するものです。しかし、『傷寒論』にある六経（六病位）

の症状がみられない風邪もあって、これを感冒かんぼうといひます。そのようなときが、この香蘇散であると考えています。

紫蘇は辛・芬ふんです。この「芬」とは香ばしい香りがする性質を表します。気味・質は、ともに軽いものです。発汗作用を有し、皮膚にある表邪ひょうじやを解除します。この邪気が進行してくると、抵抗力を持つ正気せいき（真気しんきと同じ。immunological and nutritional power）が渋滞します。香附子・陳皮は辛・温で、よく気を働かし、この渋滞を散開させます。そして、正気が運行を再開すれば、邪気は自然と消失します。甘草の甘・平は中焦ちゆうじやうを調和することで、正気の働きを助ける程度のものです。

【予の口訣（4）】

- ①軽症の感冒に本剤を用いて発汗させます。
- ②気鬱きうつの患者。すなわち、息苦しい、胸苦しいなどの胸部症状があつて、神経痛、意欲低下、頭痛などの症状があるときに、本剤でこの鬱を解除させます。
- ③鬱熱うつねつして発汗がなく、改善と増悪を繰り返すときは、本方に柴胡・山梔子各一錢を加えて投与します。
- ④婦人しつじよ、室女（old maid）が悩み事などで、突然に悪寒・発熱するときは、妊娠前・産後を問わず、すべて、本剤で加療します。

(中-2)

じん そ いん
参 蘇 飲

〔66〕 参蘇飲 効能と証

出典：『和剂局方』

■効能又は効果

感冒，せき

<証に関わる情報> 使用目標＝証

胃腸虚弱な人の感冒で，すでに数日を経てやや長びいた場合に用いる。

- 1) 頭痛，発熱，咳嗽，喀痰などを伴う場合。
- 2) 心窩部のつかえ，悪心，嘔吐などのある場合。

【POINT】 四季を通じての，感冒・発熱・頭痛・咳嗽・^{がいそう}声が重く・^{なせき}膿性鼻汁に有用です。

【組成】 紫蘇・^{しそ}桔梗・^{ききょう}枳殼・^{きこく}陳皮・^{ちんぴ}半夏・^{はんげ}白茯苓・^{びやくぶくりょう}人参（各一錢），^{ぜん}前胡・^こ葛根（各二錢），^{かつこん}木香（五分），^{もっこう}甘草（一分）。

上に^{しょうきょう}生姜・^{たいそう}大棗・^{けいひ}桂皮各二錢を加えて，水煎して服用します。

〔66〕 参蘇飲 組成

| | | | |
|----|---|----|-----|
| 半夏 | 3 | 大棗 | 1.5 |
| 茯苓 | 3 | 人参 | 1.5 |
| 葛根 | 2 | 甘草 | 1 |
| 桔梗 | 2 | 枳実 | 1 |

| | | | |
|----|---|----|-----|
| 前胡 | 2 | 蘇葉 | 1 |
| 陳皮 | 2 | 生姜 | 0.5 |

【解説】本剤は発散を和緩させる効能を有すると考えています。したがって、老人・^{きよじん}虚人（虚弱体質者）・小児・疲労倦怠時・妊娠時，これらすべての感冒に投与可能です。^{ふうかん}風寒が皮膚などの表（outside the body）にある場合は、当然、発汗させるべきです。したがって、紫蘇・葛根・前胡が配合されています。邪が集まる場所は、必ず「気」が虚して（decrease）いきます。そこで、もちろん、人参・茯苓・甘草を用いて補気するわけですが、さらに、木香・半夏・枳殻・桔梗・陳皮の配合によって、痰を消去して^{めぐ}気を順らせるようにもします。生体防御に働く「^{せいき}正気（=^{しんき}真気）」が^{めぐ}順り始めると、邪気は滞留することできないからです。

ここで、次の質問をする方もいるでしょう。「一般の臨床医は、日常診療で人参・木香を配合していないが、これでよいのか？」と。実は、予がこの本を著す少し前に『病家要覧論（?）』を読んでいるときに、次の2つの記載を目にしました。①^{きやうていげん}龔廷賢（16-17世紀、『万病回春』の著者）によれば、「^{がいそう}熱発のある咳嗽患者では人参を除去するほうがよい。これを『^{はい かりうがい}肺火勞咳』といい、人参の配合が最もよろしくない」と。さらに、②「^{せい}気が盛んであるときは、木香を除去するほうがよい」と。この理由は、正気ではなく^{じやま}熱邪の気、つまり、邪気のほうが木香によって、さらに盛んになるのを恐れてかと思われます。しかし、予は、木香の配合はよいのではないかと考えています。

【加減の方法（9）】

①天候が寒い時期。①感冒で悪寒・無汗・咳嗽・喘急，②^{しやうふう}傷風で無汗・鼻塞・声重く・咳嗽，以上①②の場合は、本剤に麻黄二銭と杏仁一銭を加えます。

②感冒の初期で、肺症状が多く、発熱があるときは杏仁・黄芩・桑白

皮の各一錢を加えます。

③肺寒咳嗽（寒邪による肺病での咳）には五味子・乾姜の各五分を加えます。

④胸の中が詰まって苦しいという「胸滿きょうまん」があって、痰たんが多くあれば、栝楼仁一錢を加えます。

⑤氣促喘嗽（呼吸苦のある咳）には知母・貝母の各一錢を加えます。

⑥發熱には柴胡・黄芩を加えます。

⑦頭痛には、川芎・細辛を加えます。

⑧咳嗽が長期に止まらず、微熱が持続するときは、知母・貝母・麦門冬を加えます。

⑨妊娠の傷寒のときは、半夏を去って、香附子・黄芩を加えます。